# MASQUERADE　―マスカレード―

中里肴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＡＳＱＵＥＲＡＤＥ　―マスカレード―

【Ｎコード】
Ｎ２９２８Ｚ

【作者名】
中里肴

【あらすじ】
幻のＶＲＭＭＯＲＰＧ『仮面舞踏会』。世界初のＶＲＭＭＯＲＰＧが突然の発売中止を宣言してから数年が経過した。現在は年に何本ものＶＲＭＭＯＲＰＧが発売され次第に忘れ去られていきつつあった、ある６月の日の事。　　俺は、彼と出会った。

※執筆修行に書き始めた作品ですので誤字脱字、その他諸々あるかとは思いますがどうかご容赦を。

# プロローグ

「仮面舞踏会――ねぇ…。」

ある昼下がりの教室。６月にしては珍しい快晴の今日、昼食のおにぎりを１人寂しく頬張りながらネットサーフィンをしていた俺はたまたま見つけた掲示板のスレッドに目を留めた。

それは幻のＶＲＭＭＯＲＰＧ―『仮面舞踏会』に関するものだった。

（まだ信じてるヤツがいたなんてな…。）

お茶で口の中のそれを胃に流し込んで一息吐くと時計を確認する。まだ次の授業まで時間がある事を確認すると仮想モニターに再び目を落とす。

（うわぁ…『俺は仮面舞踏会のプレイヤーだ』とか）

今更そんな言葉を信じる馬鹿はいないだろうに。何だか憐れな気さえしてきた。

仮面舞踏会は世界初のＶＲＭＭＯＲＰＧとしてその名を知らない者はいない程で、ゲームには全くと言っていいほど無関心だった我が家の父でさえもテレビでＭＥが取り上げられている時は新聞から僅かに顔を上げて聞いていた。

日本中の誰もが待ち望んだそれはしかし、発売間近に迫ったある日、発売中止となった。

その後の苦情の山とマスコミの関係者に対する執着心たるや、想

像を絶するものだったとかなんとか、詳しい事はよく知らない。ただ、俺もかなりショックを受けたのはハッキリと記憶している。

つまり、店頭にさえ並ぶ事の無かったゲームなのだ。それをプレイしているというのはおかしな話だ。

そもそも、凍結したはずの運営はどこの誰が行うというのだ？それだけで嘘だと分かるだろうに。

（まぁ、やってみたいって気持ちは解るけどな。）

そこで授業開始を告げるチャイムの音が鳴り響いた。と同時に外部ネットワークとの通信が遮断される。

スレッドの代わりに仮想モニター上で再生を始めた数学の授業用プログラムの映像を一瞥すると左隅にある１０倍速のアイコンを押して窓の外の景色へと意識を向けた。

（かったるいな、ホント。）

今日の授業内容分は昨日予習をしておいたので既に頭の中に入っている。

両親の世代は教師が直接授業を行っていたらしいが、定期考査の作成と文化祭や体育祭などの行事の準備が主な仕事となった現在では授業中に居眠りをしようがボーッとしていようが結果さえ残せれば何も言ったりはしない。

プログラムが終了したのを確認すると１週間前にインストールした電子書籍を開く。十年以上も昔に出版された外国のファンタジー小説なのだが、これが中々面白い。暇潰しにもってこいの大ボリュームであるのもグッドだ。

物語も佳境に差し掛かった所でふと射るような強い視線を感じて

何気無く顔を上げると、そこには嫌悪感剥き出しの雫（幼馴染み）の顔があった。
「なにやってんのよ、アンタ。」
右手で頬杖をつき、左手の人差し指でコンコン、と机を叩く。
「読書だよ、見りゃ分かるだろ。」
「まだ授業中なんですけどぉ？」
壁に掛かっている時計を示す。メンドクサイ奴だな…。
「他の奴らにも言えよ、」
「今はアンタの話してんだけど。」
（いちいち突っ掛かるなよ、ホント）
「あ～分かった分かった、やめれば良いんだろ、やめれば。」
ヒラヒラと手を振ると栞を挟み込んでから閉じる。
「今だけやめれば良いってもんじゃないでしょ！？」
従ってやったというのにまだ噛みついてくるかコイツは。
「ちょっ、待ちなさいよ！！ねえ――匠！！」
「――ったく、中学じゃ話しかけても無視してたくせに…何だよア

イツ。」

放課後、1人帰路に就いた俺は自宅とは逆の方へと向かう。まあ、寄り道ってやつだ。

（確か数日前に新作のゲームが発売されていたはず――。）

駅前のゲームショップまでの道程を脳内再生し曲がり角に差し掛かった所で不意に人影が――

「痛ッ！！」

減速する事無く突っ込んで来た初老の男性はかなり深刻な表情をしていた。

「す、すまない少年。しかし急いでいるのだ、赦してくれ！！」

地面に倒れた俺の腕を掴むと強い力で引っ張り上げると顔を隠すようにグレーの帽子の鍔を下げて、次の曲がり角へと走り去った。

「大変そうだな――ん？」

地面にいかにも高そうな金のチップケースが転がっていた。恐らく先程の男性の物だろう。俺はそれを拾い上げる男性の後を追った。

「――いた！！」

前方20メートル、人混みのせいで思うように進めないのか人と人の間を縫って進む彼の姿を見付けた。

「チップケース落としましたよ～ッ！！」

（だめだ、喧騒に掻き消されてる。）

あるいは自分の事だと気付いていないのかもしれない。
やむを得ず前を歩く人々を強引に押し退けて行く。舌打ちやら文句やらを浴びながら進み続ける。

「ちょっと、どこ見て歩いてんのよ！！」「危ねーなッ！！」

「御免なさい御免なさい！！」

ようやく彼の背中が見えた時には酷い有り様だった。走ってもいないのに息が切れ、セットされていたはずの髪はボサボサ。行き交う人々がチラチラと盗み見ては口許を押さえて笑いを堪えている。

「これ、落とし物、ですよ。」

息を整えながらチップケースを差し出すと、僅かに驚いたような表情を見せる。

「これをわざわざ届けに？」

「え？そう…ですけど。」

「これの中身は？」

「見てないですけど…？」

余程大事なモノ？まさか、かなりヤバいモノだったり…？

「成る程、成る程…。」

ケースと俺を交互に見遣る。全てを見透かすような視線に思わずたじろいだ。そして、

「ありがとう。――しかしこれはもう私には必要の無い物なんだ。」

手の中でポンポンと軽くお手玉して柔らかな、それでいてどこか切なげな笑みを浮かべる。

「――だから、君にあげよう。」

ピン、と親指に弾かれたチップケースが弧を描いて俺の掌に収まった。

「え、あの、え？」

唐突過ぎる申し出に戸惑う俺に『使うかどうかは君次第だがね。』とだけ言い残して去ってしまった。

「あの～…。」

完全に置いてきぼりを食らった俺をまるで嘲笑うかの如く、チップケースがキラリと光った。

◇◆◇◆◇

「ただいま。」

時刻は午後7時半。真っ暗な家の中で点滅する電話機が目に入った。留守電、恐らく父親からだろう。

メッセージは予想通り父からで、今夜は遅くなるから夕飯は要らないとの事だった。

（今夜はカップ麺で済ませるか…。）

ポットの中のお湯の量を確認すると殆ど残っていなかった。

水を沸騰させてる間にベランダに干されたままの洗濯物を取り込む。日が落ちて大分経ったせいで冷たくなっていた。　寒さに身震いしつつ、手早くそれらを抱え込んで室内へと帰還する。

冷えた身体を包むように二の腕を擦りつつテレビの電源を点けると、気象予報士が向こう1週間の天気を告げていた。

「明日6月7日の天気は――」

洗濯物を畳みながら適当に聞き流していると、不意に街で会った男性の言葉を思い出した。

『使うかどうかは君次第だがね。』

ゴソゴソと制服のポケットからチップケースを取り出す。

かなり小型のチップ、これに対応する端末はアレ以外は有り得ないだろう。

《ドリーム》　――世界初のＶＲ機器をおいて、他には。

「使うかどうかは君次第――、」

ケースを開き、チップを取り出す。1?×1?の極小サイズのそれを目を凝らすように注意深く観察したが、そこにはたった1字大きく刻まれた“M”の文字があるだけだった。恐らくはこのゲームの名前の頭文字(イニシャル)なのだろう。

（“M”――まさか、マリ…いやいや、ナイナイ。）

頭に浮かんだ考えをかぶりをふって否定する。赤帽に青いオーバーオールの配管工になれてもあまり嬉しく無い。

（とにかく、だ。実際に確かめれば良いんだ、うん。）

そう結論付けると、バラエティ番組の始まったテレビの電源を落として自室へと向かう。

簡素な部屋の数少ない家具――本棚とクローゼットの隙間にひっそりと息を潜めていたそれはバイクのヘルメットのような形状をしている。ホコリが積もっている様子はお伽噺の『かさこ地蔵』を思わせる。

「最近めっきり使って無かったからな…。」

フッと息を強く吹きかけてホコリを粗方飛ばすと残りをガムテープでくっつける。あまり使っていないので傷一つ無く、まるで新品のようだ。

「本当は第2世代(チョーク型)が良かったんだけどな…。」

フルフェイスの第1世代は見た目の野暮ったさ以前に機能面にも

欠陥がある。　と言っても動作停止やバグの類いでは無い。
長時間連続プレイし続けると首が痛くなるのだ。どうやらドリーム機の重量に問題があるらしく、説明書にも大きな赤文字で記載されていたはずだ。

「とりあえず設定だけ整えるか。」

明日は金曜日、学校が終わってからいくらでもプレイする時間はある。
チップを差し込み口に挿入、やや重量感のあるヘルメットですっぽり顔を覆うと手探りでスイッチを入れる。
スイッチがスライドする確かな手応えを感じる間もなく意識が遮断された。

目覚めると俺は仰向けになっていた。ノロノロと上体を起こして辺りを見渡すが、何も無い。人っ子1人、いや、石ころ1つ草1本さえどこにも見当たらない。ただ平らに開けた土地が何処までも続いているのみだ。殺風景とはまさにこの事だろう。
薄暗く地上を照らす太陽の光は現実のそれとは比べるべくも無い程に弱々しい。いっそ月光だと言われた方が納得するだろう。

『夢の世界へようこそ。』

「ッ！！」

声があった方へと振り向くと、“彼”がいた。ただし頭上にあるのはグレーの帽子では無く、黒のシルクハットだ。

「貴方は、いや、それ以前にどうやって…！？」

「あぁ、“コレ”はダウンロードさえ完了すればチップもＶＲ機も必要としないからね。」

「…？」

ゲームのハードであるＶＲ機も要らない――って、それじゃあゲームは何処に…？

混乱する俺の顔を実に愉快そうに見ていた彼は、やがて口を開いた。

「つまり、ダウンロード先は私達の頭の中という事だよ。」

# 1

「頭の中！？」

「素晴らしい考えだと思わないかい？そんじょそこらのメモリーカードなんか比較にならない大容量と電気信号を伝える回路を併せ持つ媒介。更に、常駐型でもある。」

悪戯っ子のような笑みを見せる。

「はぁ…。」

「ま、そんなのはどうでも良い事だ。今は――」

葉巻を胸ポケットから1本抜き取り咥える。

「――全力で楽しみたまえ、少年。」

ライターに火が灯った瞬間、強烈な閃光が辺りを包む。

「また逢える事を祈っているよ。」

◇◆◇◆◇

「――ここは…？」

目を開けると某名作漫画にありそうな荒廃した土地では無く、そ

れとはむしろ対極に位置する緑豊かな森の中だった。　先程まで一緒にいたはずの男性の姿も無い。一体どうなっているというのか…。
兎に角、この森から抜け出すのが先決だ。時折聞こえてくる飢えた獣の鳴き声も精神衛生上よろしくない。
右も左も分からないまま前へ前へと突き進むがしかし、異様な静けさは何処まで行っても同じ。
段々と不安になってきた。

「チュートリアルとか、ねぇのかよ～…。」

ピタリと足を止めて辺りを見回すがゲームガイドの声が聞こえたり、周囲が暗転したりといったお決まりのアレが起きる気配は無い。

「あるのはこの仮面だけ、か。」

透明な仮面。指で叩いた感じから察するに恐らくは硝子製、目を覆うタイプのようだが、これでは着ける意味が――。　何の気無しに着けてみて驚いた。視界を遮らないように２つの穴、鼻の輪郭をなぞるようなライン。まるで――

――まるで、“自分のために作られたか”かのようだ――。

そして、気付いた。このゲームが何であるか。

「仮面舞踏会――“ＭＡＳＱＵＥＲＡＤＥ（マスカレード）」

呟いた瞬間、乾いた音が耳元で鳴り響き――視界がホワイトアウトした。

『第一段階、親和性テスト終了です。続いては第二だ――』

薄れゆく意識の中で、機械質な女性の声が鳴っていた。

◇◆◇◆◇

いつもの見馴れた天井があった。いつの間にか仰向けになっていたらしい。首は――痛くない。という事はあまり時間は経っていないという事になる。

「7時45分、」

5分弱。成る程、それなら確かに首が痛くなる事はないだろう。しかし、

「“たった”5分間…？」

そう、それはあり得ない。現時点のVR機の性能ではゲーム起動時と終了時、合計で10分はかかるからだ。

ソフト側が如何に優秀でもハード側に問題があってはどうしようも無い。素晴らしい性能の銃をずぶの素人に使わせても経験者には敵わないのと同じだ。

「どうなってるんだ…？」

右手で髪をかき上げる。考え事をする時、よく父がこうしていたのが、いつの間にか感染(うつ)ってしまった。

「何が、どうやって、」

浴槽に張った湯に浸かり、ドライヤーで髪を乾かし、カップラーメンをすすり、歯を磨いて、それでも答えは見付からなかった。

そして、ベッドの中へ潜り込んだ時もそれは変わらず

（どうし、て…。）

堂々巡りを繰り返していくうちに眠りへと落ちていった。

◇◆◇◆◇

――俺は夢の中に居た。

遠い昔の再現、家族3人で旅行へ行った時の事だ。不思議な事に夢は順調に進んで行く。脚本家たる俺が忘れている事にも関わらず淀みなく進んで行く。

陽気に惚ける父の姿。もう何年も見ていない笑顔がそこにはあった。

母が俺にかまっていると、機嫌をすぐ損ねて――そうそう、こうやって頭を撫でて貰って『まるで子供が2人居るみたいね。』って、言ってたんだよな…。

懐かしい母の笑顔。見る者を穏やかな気持ちにする優しい微笑みだ。父も、そして俺も、笑っていた。

きっとこの時の俺達は、何時までもこんな日々が続いていくのだと信じて疑わなかったのだろう。何の根拠も無く、ただ漠然と油断

にも似た安心感があったんだと思う。
だから不慮の事故、なんてのは自分達には関係の無い物だって、思っていたんだろう。いや、もしかしたらそんな事は意識すらしていなかったのかもしれない。

俺は、決して取り戻せないその笑みを、横顔を、団欒を、何時までも眺めていた。

『第二段階、抽出テスト終了です。続いて最終段階に移行します――。』

バチィッ！！

突然、放電のような音が空間を引き裂いた。

「今なん――て、」

叫んだ時には既にベッドの上だった。父の笑顔も母の姿も無い。真っ暗な中で時計が一定のリズムで時を刻む音が脳の覚醒を促す。

「最後のアレは一体――？」

確かにゲームで聞いたシステムコールと同じモノだった。
第一から第二、そして最終段階。これが意味するものは1つ。

アバターの作成、またはそれに準ずる何か。少し、いやかなり変わってはいるがそれ以外には考えられない。考えられないのだが――

――どうして“ＶＲ機と接続していない状態でゲーム内に入る事が出来たのか”？

（となるとさっきのはただの夢…？）

考えるのは後回しだ。コーヒーでも飲んでとりあえず落ち着こう。そう言い聞かせてベッドから抜けようと床に下ろした足が何かを蹴った。

「――ッ！！」

言葉を失った。

それは夢の中で見た仮面と同じモノだったからだ。しかしそれ以上に彼を驚愕させたのは他でも無い“あの”男性の姿だった。ただし、今回は顔の半分を仮面で覆い隠している状態ではあるが。

「やはりここまで来たんだね。おめでとう、と言うべきかな。」

尚も固まったまま動かない俺の代わりに床に転がっている仮面を拾い上げると半ば強引に押し付けた。

「これからは決して肌身離さず着けておくように。これは君の“弱さ”を隠してくれる。」

「あの…これって夢の中じゃないんですよね？」

「いや、夢の中だが？」

「え、でもこれってゲームじゃ…」

いつの間にか寝間着から普段着になってるし…。

混乱しかけた脳内を整理するため思考に努める。が、

「ゲーム、それも正しい。」

「は？」

いかん、ショートしそうだ…。

「つまりだ。」

「夢であり、現実（ゲーム）である。それがこのゲームの本質なのだよ。お分かり戴けたかな、少年――いや、ここでは“ファントム”と呼ぶべきか。」

まるでその言葉を待っていたかのように男性と、そして俺の頭上に2本のゲージと文字列――アバター名が表示された。

「それでは改めて、」

男性、アバター名　《ユダ》がグレー帽を右手に抱えて礼をする。

「―“ＭＡＳＱＵＥＲＡＤＥ”《仮面舞踏会》へようこそ、ファントム。今日から私が君の師匠だ。」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2928z/

---

MASQUERADE　―マスカレード―

2011年12月15日01時53分発行